

「軽井沢の馬」にならぬいために ——千人の敵に一人の友

武内道子先生が二〇〇九年三月に、定年退職されました。重い病と闘いながらそれを克服して到達した一つの終着点。精神的にも肉体的にも、どれほど多くの苦悩を経験されたか、想像にあまりあります。

先生は平成二年に、神奈川大学短期大学教授としておこしになられましたが、平成一二年に、短期大学が廃止されたのに伴い、外国語学部の英語英文学科に移籍されました。武内先生は、短期大学部の同僚だった歴史学者の網野善彦教授を尊敬しておられましたが、敬愛する同僚とも永遠の別れを持たれ、新しい職場ではさぞ心もとなかったことでしょう。さまざまご苦労を経験されていることは傍目にも分かりました。

武内先生はわたくし宛てのお手紙のなかでこう記されております。「大学というところは、大いに学ぶと書くよう學問するところ、學問とは「なぜ」(Why)」を追求することであると考えています。教員は、『軽井沢の馬』(狭いところを行き来することから、狭い視野と知識に陥った人)にならないよう、お互い切磋琢磨しなければなりません。」

不思議なことに、最高学府である大学には、我が大学にも、自由な発想と議論がみなぎつていなければなりませんが、それを阻む、ただただ我が身可愛さのセクショナリズムの目に見えない鉄のカーテンがあちこちにおろされているのです。学生を新しい世界に教え導き、みずからも先達の研究に挑戦し新しい研究を発信す

る進取の活きに富む学徒はその鉄のカーテンに阻まれて途方にくれ、自己粉碎にまで追いつめられ、もがき苦しむものです。わたしもそのひとり。移籍された武内さんもそのひとり。大学全体を見渡せば、そのセクショナリズムがいかに稚拙で大学の発展を阻んでいるかは一目瞭然なのですが、渦中にいる人間にはそれが分からぬ。そんな環境のなかで、武内先生は、わたしたちが「軽井沢の馬」にならないためにセクショナリズムの一角を打ち破り、「対照言語学研究会」を立ち上げ、その研究会を主体として共同研究助成制度を受け、学科や狭い専門領域の枠を超える同僚との活動に活路を見いだしました。と同時に、一二年間にわたり、言語研究センターの紀要『神奈川大学言語研究』の編集を手がけられ、紀要を、研究者たちの切磋琢磨の場として位置づけ、研究者たちの意識を高揚させ、紀要の体裁を整え格を高めるのに尽力しました。どれほど多くの同僚が先生の意氣込みの恩恵に浴したことでしょうか。

武内先生の学問への情熱、それを裏切らない研究業績の発信、教育熱、そして、わたしが何よりも心打たれたのは、先生の学生にたいする深い慈しみでした。先生と一時間でもともにした学生は気づいたでしょう。どれほど深い愛情を先生が学生に抱いているかを。先生は語っています。「教師としての姿勢、やるべきこととして二つを心がけてきました。やる気のある子は放つておいてもやる、やる気のない子はどう指導してもやらない、故に教師は彼らに興味を失わしめないこと。教師にできることはせいぜい彼らの、萌えいづる芽を摘まないことだと思います。第二に自分の学問しているところをみせること。学生（子ども）は言つたようには育たないもの、しかしやつたように育つというのが持論です。」又、「卒業生は大学の宝」という先生の言葉も心に残っています。

武内先生とわたしは専門領域がまったく違うので、純粹な学問的交流を持つことはありませんでしたが、一緒によく話し、食べ、飲んだものです。その場は、大学周辺の素朴な居酒屋でもあれば、洒落たフレンチ・レストラン、イタリアン・レストランのこともありました。ちょっと格式のあるところでお食事をするときは、お洒落な先生は、宝石の耳飾りと首飾りがお揃いのセットでさらりと装い、あらわれました。わたしたちの合い言葉は「千人の敵がいても一人の味方がいれば幸せと思おう」。そう言い合いながら、赤ワインで乾杯し、たがいに「一人の味方」であることを確認し、何度も慰めあい勇気づけあつたことでしょう。身に余る幸せです。

二〇一〇年一一月吉日

石井美樹子